



TITLE:

静田 均先生の思い出

AUTHOR(S):

高橋, 哲雄

---

CITATION:

高橋, 哲雄. 静田 均先生の思い出. 経済論叢 1992, 149(4-5-6): 187-190

ISSUE DATE:

1992-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/44826>

RIGHT:

# 經濟論叢

第 149 卷 第 4・5・6 号

---

## 哀 辞

故 静田均名誉教授遺影および略歴

内発的發展と国民經濟……………	池 上 惇	1
国際的展望の中で見た日本のメーカーと サプライヤーとの関係……………	浅 沼 萬 里	18
地方財政調整制度をめぐる代表的論者間の 論争とその現代的意義……………	李 昌 均	59
多属性効用分析における部分情報下の スケール定数の決定……………	朴 時 炫	82
総合商社の鉄鉱石商権と競争……………	田 中 彰	107
住友金属工業の第2次合理化設備投資と 新しい生産体制の成立……………	張 紹 喆	125
加工型畜産と飼料メーカーの展開……………	村 上 良 一	145
GMの「戦略的再編計画」の展開過程……………	平 野 健	160

## 追 憶 文

静田均先生を偲びて……………	岡 田 賢 一	183
静田均先生の思い出……………	高 橋 哲 雄	187

---

平成 4 年 4・5・6 月

京 都 大 学 經 濟 學 會

## 静田 均先生の思い出

高 橋 哲 雄

私は学部時代には大野英二先生のゼミに属していて、静田先生に就いたのは大学院からのことだった。いまでもそうなのか不案内だが、38年前の当時、助教授は大学院の指導教官になれないことになっていて、大野門下生はほとんどが静田先生のところに送り込まれていた。

これは学生にとっても教官にとっても、ある意味では迷惑な制度だった。学生にとっては自分が選んだわけではなく、自分のテーマにとって必ずしも最適とはいえない人を指導教授とせねばならぬという不合理があり、そのうえ二人の師に仕えるという面倒と苦勞があった。教官にとっても、もちろん同じことが裏返しにいえるはずだった。そんなわけで、形式だけの「宿借り」と割り切って、教授のところへはまるで寄りつかぬ学生もいた。私などは気配りに無縁な方だったので、考えのちがう複数の先生に指導を受けるのはかえっておもしろいのではないかと楽観的に考えていたが、それでも当惑する場面がなかったとはいえない。

そうした「宿借り族」のひとりであった私が静田先生についてまず発見したのは、先生の「寛容」であった。先生は河上肇門下のマルクス経済学者であり、また戦前の農業問題についての著書によって「労農派」の驍将とされていたけれど、それにしておどろくほどイデオロギーから解放されておられた。私はその頃、先生からまったく評価されていない「宇野理論」に関心を抱いていたが、そのことで先生から冷かされたことはあっても、かけらほども冷たくあしらわれたことはない。先生は自分の考えを他人に押し付けることを好まず、「宇野理論」や「講座派」を批判するばかりでも、発想の根本的不自然さと事実との不適合性をクールに指摘するにとどめられた。いまでは当然のことと受けとられるかもしれないが、「政治の季節」のただなかにあった昭和30年前後の時代のマルクス経済学陣営にあっては、この寛容は稀有の美徳だったといわねばならない。

寛容な先生も、「政治」が学問の世界に入り込むのには寛容ではなかった。スターリ

ンが書いたというだけで「最大限利潤の法則」なるものが有難がられる奇怪さをわらう人は先生のほかにも少なくなかったけれど、帝国主義を論じるに当たって、レーニンをホブスンやヒルファージングより高く評価するのはおかしいと声をはげまして論じる人は、ごく稀であった。だってレーニンは独創性においてはるかに劣るではないか、ほんの少しを付け足しただけではないか、といわれるのだった。そんなことをいえば「修正主義」とか「流通主義」といったレッテルを貼られかねなかったが、そんなことを意に介する先生ではなかった。

先生はもともと政治的人間ではなく、党派的でもなかった。先生はカリマス性のある「親分」ではなく、その限りでは「大物」でもなかった。そうしたうさんくさい存在であるにはあまりにシヤイであり、自己批判力があつた。資質も性向もちがう人たちが、たまたま誰かの門下に属するというだけで同じ考えをもつということのグロテスクさをよく知っておられた。だから、先生の弟子たちは悪くいえばバラバラ、よくいえばそれぞれが自由な考えの持ち主で、近代経済学に深く進んでいった人もいる。先生自身も京大を定年で辞されたあと、名古屋市立大学に経済学部を設立するため力を藉されたときには、近代経済学の充実に大いに意を用いられたと聞く。

つまり、先生は本質的な意味でリベラルな人であり、かつ個人主義者だった。私は院生時代に、学部学生のゼミのコンパによぶれて出たことがある。ひと通りアルコールが回って、学生からみればさあこれからというときに、先生は幹事を呼んでしかるべき金額を寄付され、あとはよろしくと席を立たれた。学生たちにはこれは不満であつたらしく、先生は冷たいと、代わりに吊し上げを食ったものだ。これは冷たいというのではなからう。先生は学生のために時間を割くのを惜しむ人ではなく、ただ自分が酒席で別の人格を演じることのできない人間であることを知っておられ、それが学生の期待を裏切ったり、興を妨げるのを避けようとされた心づかいと、私には思える。それは、しかし、学生の気持とはやはりズレているのだが、とも思わずにはいられないけれど。

先生は米沢の士族の家に生まれ、早くに父上を失い、母堂の手で育てられたと聞く。胃腸が弱かったので、学生時代は母堂が京都に出てこられて食事の世話をされた。先生はこの母堂に「です」調で話しかけられ、家に戻ると必ず手をついて挨拶しておられた。私たちに対してもこれは同じで、お宅に伺うと必ずこちらは上座に据えられ、ご自

分がまず座布団を外して手をついて挨拶された。「です」調のやりとりは、ご子息と先生の間でもそうであった。そうした折り目の正しさが、かたちだけのことでなく、人とのつきあいの中味にも反映されていたのだと私は思う。酒席であれ、密室であれ、安易ななれあいや、もたれあいを許さぬ品格が、先生にはあった。

これは少し差障りのある話だが、関係者はすべて故人でもあり、もう時効としてよいだろう。旧制最後の学位審査のときの話である。長老格の同僚の某教授が論文を提出されたが、下読みの段階で、先生を含む三人の委員とも論文としては問題にならないことで一致した。ところが、そのうちの一教授が、当の教授の行政上の功績、学会・社会への貢献、人柄などを挙げて何とかならぬかといわれ、挙げ句は尊敬する先輩が学位をとれぬようでは自分の立つ瀬がないといって涙をこぼされたという。静田先生はよほどご立腹だったのだろう。「世も末だ。そんな話を耳にするだけでも、もう京大には居たくない」と嘆かれた。もちろん、当の論文は取り下げられたのであるが。

人によっては煙たいとも頑固ともとるであろう、先生のこうした公正さと孤立をおそれぬつよさへの信頼が、戦後の学部再建という重大な局面で、当時42歳にすぎなかった先生を再建学部長に押し上げたのではなかったか。「学部再建」というのは、敗戦後戦時中の言動に対する責任のとりかたが大きな問題になり、議論を重ねた末、教授の全員が辞表を提出し、その一人ひとりについて辞表を受理するか否かをあたらしく選ばれた学部長に一任するという、ふつうでは考えられない非常大膽の措置によって、あたらしい学部構成を決めてゆこうというものだった。占領軍によるページを控え、事情やむをえぬところであったとしても、こうした異例の策が選択されたのは、静田先生の人物が当時の学部スタッフの念頭にあったからではないか。

この難しい時期の先生は外部からみても信頼に値する存在であつたらしい。当時理學部長であった原子力物理学の権威荒勝文策先生は先生の人を敬愛し、のちに荒勝先生が甲南大学の学長として、経済学部の創設に当たられたときも、もっとも親しい相談相手とされ、先生もそれに応えられた。それでいて、先生ご自身は甲南に移られなかったのも、いかにも先生らしい。

ゼミでの先生で記憶に残っているのは、「ソクラテス的」ともいうべき先生の方法だった。学生が何か不確かなこと、不消化なことを発言すると、きまって先生は「○○君

のいうことはこういうことですか」と前置きして、その発言内容をよりの確に、よりわかりやすく、ばあいによってはその行きつく先までも示唆しながら、しかしけっして言いつくすのではなく含みを残して言いかえられた。学生には、自分の発言を鏡に映されたうえで、もういちど態勢を立て直して発言をやり直す機会が与えられるわけである。つまり、先生は学生の自己発見のための助産婦役を勤められたのだ。これは私が先生から盗んだ数多くのノウハウの一つになっている。もっとも、貧乏ゆすりといった有難くない癖まで感染してしまったのは情けない。

先生とのさしの対話は、ゼミ以上に楽しかった。先生の話の楽しさはその学殖とユーモア、それに温かみにあった。ひとつだけ例を挙げよう。

大学院を退学するとき、学部の窓口で手つづきを訊ねたら、まず指導教授の了解を得ることと聞かされ、研究室をお訪ねしたことがある。例によって四方山話に花が咲き、時間を忘れ、ついでに肝心の用件も言い忘れたまま辞去した。私は幼時から健忘症がひどく、四回生のときには全科目受験届を出し忘れ、始末書を出して危うく留年を免れたこともある。

翌日学部事務室から電話があり、静田先生に貴君の退学の件をお訊ねしたら、本人は来たがその話は聞いていないといわれた、どうということなのかとお咎めの口調だった。あわててさっそくお詫びの手紙を送ったところ、折り返しお手紙を頂き、文中、「いつもながらの『葉簞を付け忘れた セント・バーナード犬』（ガンサー『アフリカの内幕』）ぶり、微笑しく存じました」と、先生の莞爾たる笑みがこぼれてみえるような温かい文章があった。セント・バーナード犬とはむろんアルプスの救助犬で、遭難者が出るとどんな危険な場所でもすっとなで行く、まあそういう気質の犬である。妻にいわせると、私の森の石松的な無鉄砲さと粗忽さを評し得てこれほど巧みな表現は聞いたことがないということで、以来わが家ではこのあだ名が定着してしまった。

それにしても、こういう引用がたちどころに出てくるところは並の経済学者にはないことで、考えてみれば、私はそういう面でも先生に魅かれ、先生に追いつきたいものと思いつづけてきたような気がする。還暦をすぎたいま振り返ってみると、少なくとも50代からの私は、私の知っている同じ年代の静田先生の歩きぶりを無意識に模倣してきたように思われてならない。孤立をおそれぬつよさと、あの魅力的な微笑ぶりだけは、いくつになっても真似のしようもないのだけれど。